

Topic 1

中だるみの秋だから普段より成績が伸びる!?

2学期は「中だるみの秋」とよく言われます。実際2学期は、学校行事が比較的多く、またテストまでの期間が空くことから、勉強以外に時間をとられ「中だるみ」になりやすいのです。逆に、コンスタントに学習できている人はそれだけで、成績が伸びやすいということ。特に高2生は受験勉強開始の入り口に差し掛かっているのです。この時期の勉強は、「やった者勝ち」です。例として、秋から受験勉強の準備を始めたAさんと、始めなかったBさんを比較して、どんな差が生まれるのか見ていきましょう。

◆秋から準備を始めたAさん

- 10月：学校の勉強以外に、受験を見据えた勉強時間を確保することを決意。
土日に多めに時間をとり、**週10時間の受験勉強**を計画。
- 11月：苦手科目が数Aであることが分かったので、数Aの教科書と学校問題集の直しを計画に組み込む。
- 12月：苦手科目の数Aが模擬テストで好結果。学習の成果を感じてやる気アップ。
冬休みからの本格的受験勉強に拍車がかかる。
- 1・2月：高3から履修する物理と化学を映像授業で先行して始める。
「(基礎なしの)物理、化学は学習量が多く、あとあと苦勞すると予想できたので、1月からの受講はとても役立った。」(Aさん談)。
- 3月：苦手単元克服、受験科目の先行受講で、受験勉強準備はOK!
4月から学校の演習中心の授業が始まっても安心!

◆秋からの準備を始めなかったBさん

- 10月：学校の間テスト以外の勉強は手付かず。苦手教科の数Ⅱは学校からの特別課題が出されて、それに四苦八苦。
- 11月：定期テストがない開放感から、勉強時間がゼロの日も。「まわりもそれほどあせている様子はないし、まっ、いっか。」と思っていた。(Bさん談)
- 12月：模擬テスト結果が返ってきて大ショック。試験後も成績票返却後も復習せず。
- 1月：受験科目の英語・数学・生物基礎を冬の講習で始めたけど、教科書レベルで分かっていないこと、忘れていたことが多すぎて、復習にかなりの時間を要した。
これからの受験準備のハードルが高いことを認識する。
- 2・3月：気持ちはあせり始めたけれども、克服すべき苦手単元の勉強法がわからない。
結局、何からとりかかれば良いのか、暗中模索のまま時間が過ぎる。
- 4月：学校の演習中心の授業では、解けない問題ばかりで、呆然。
「さすがにヤバイと思って、塾に入りなおしました。」(Bさん談)

意外とBさんタイプは多いようです。厳しい部活に所属していると「勉強したいけれど、なかなか時間がとれない」という理由で、結果Bさんタイプになってしまう人もいます。「中だるみの秋」だからこそ、計画的に勉強を進めることで受験を有利に進めることができます。高1生も同様です。自分の勉強時間を決めること(計画を立てること)で、「なんとなく勉強しない日が続く」という悪循環から抜け出すことができます。継続して勉強できている人は、この秋大きく、成績を伸ばすことでしょ。

夏を終えたこの時期の格言は「赤本を制する者は受験を制す」です。赤本の活用次第で、第一志望合格への勉強法は大きく変わります。今回は赤本を活用した効果的な受験勉強について記します。赤本とは「教学社」が発行している大学・学部別の過去問集のこと。表紙が赤いことから赤本と呼ばれています。他に青本(駿台文庫)、黒本(河合出版)も同系統の問題集です。

多くの受験生が考え違いをしているのは、赤本を「入試直前の力試し」に使おうとしていることです。去年の問題だけは入試直前に解くために「残しておく」というのも間違いです。赤本は、受験校の問題傾向と配点を知り、頻出単元から優先的に受験勉強を進めるための戦略指針となる書です。赤本の反復演習だけで、最難関大学に合格した人もいます。

①受験を決めた第一志望、第二志望の大学の赤本は必ず購入し、科目ごとの出題傾向と配点を徹底的に分析しよう。

例えば英作文だけをとっても、完全英作文が出題される大学・学部、条件英作文が出題される大学・学部、並べ替えとして出題される大学・学部、英作文は出題されない大学・学部など、大学・学部によって出題の傾向はさまざまです。自分の受験する大学・学部が英作文は出題されないのに、模擬テストで英作文が苦手克服分野と診断されたからといって英作文対策に時間をとるのは、合格する人の勉強法とは言えません。

②新しい年度の問題から解き始めよう。

古い年度の問題から解き始めて途中で出題傾向が変わっていたら、古い年度の出題分野の対策は行わなくてよかったこととなります。新しい年度の出題分野の対策を優先的に行うのが効率のよい勉強法です。

③実際に解くことで、難易度を肌で感じよう。

「まだ勉強不足で、赤本を解いても解けるはずない。実力をつけてから解こう…」と赤本を解き始めるのが遅れる人がいます。第一志望の大学・学部の1年分は9月中に実際に解いておくべきです。実際に解くことで、英語なら、その大学・学部の英単語レベルを知り、合格のためにどの程度単語力が不足しているかが分かります。数学なら、計算量が多く時間内に終わりそうにないと分かったら、計算力をアップさせるという方針が決まります。「実力不足を肌で感じる」ことが大切なのです。

自分なりの判断で勉強方針を決めるのではなく、第一志望の出題傾向・レベルと現在の自分の力の差を埋めるための勉強方針を決めることが大事です。



1 武蔵大学 英語 4 技能試験を活用した新入試方式導入

武蔵大学は、グローバル化する社会において、同大の目指す多文化共生、他者理解の視点を備えた「グローバル市民」育成推進の一環として、2017 年度入試より英語 4 技能資格・検定試験を活用した入試方式「全学部統一グローバル型」を導入する。

◆「全学部統一グローバル型」入試

各学部学科が指定する*英語資格・検定試験(4 技能)の基準を満たしていることを条件に、英語以外の 1 科目の得点を合否判定に使用する。また、人文学部の合格者は、新コースの*グローバル・スタディーズコース(GSC)に所属することが可能になる。

*採用する英語資格・検定試験(4 技能)：実用英語技能検定 / IELTS(TM) / TEAP / TOEFL(R) iBT / TOEIC(R) / TOEIC(R) S&W / GTEC CBT

*グローバル・スタディーズコース(GSC)：新しい時代のグローバル市民に欠かせない異文化理解力と語学力を備えた人材を育てるために、2017 年度から人文学部に新設された。



2 大学入試がない国 オーストラリアでは

オーストラリアの教育が日本と大きく違うのは、大学入試がないことである。勉強に縛られないので、日本の高校生にとっては、何ともうらやましい限りであるが、入試がないから大学に入るのは楽とも言えないようである。

◆中学でエッセイの書き方を学ぶ

アデレードが州都の南オーストラリア州の義務教育は 12 年生である。小学校が 7 年間、その後ハイスクールが 5 年間ある。このハイスクールでの前半 3 年間は日本の中学に相当する。

授業では、先生が質問を投げかけると生徒たちは率先して手をあげる。自分の意見を言って相手に伝えることが大事だという意識が浸透しているという。これは、大学で論文をまとめたり、社会人になって仕事をする上で大切なことだと言える。

また、いわゆるエッセイ(小論文)の書き方を徹底的に学ぶ。自分の意見を文字にする能力を鍛えるわけである。与えられたテーマ、自分で選んだテーマをもとに、人に聞いたり、調べたりして自分の表現方法でまとめる。生徒たちはエッセイの正しい書き方を学ぶことで、考える力が養われていくわけである。

◆高校で大学の専門課程の基礎を学ぶ

ハイスクールでの後半 2 年間は日本の高校に相当する。アデレードは、大学進学率が高く、入学希望の生徒は大学のコース選択が Year11(日本の高 2)で始まる。なぜなら、Year11・12(日本の高 2・3)で大学でのコース選択をした基礎課程を勉強するからである。

日本と異なり、オーストラリアでは大学の専門課程の基礎部分を高校で勉強し始める。中学で、エッセイの書き方は学んでいるので、高校の 2 年間は専門課程の基礎内容について論文中心で成績が評価される。

◆高校での成績が大学入学へとつながる

高校での成績評価は 2 系統ある。1 つは、一般教科の授業を受けて出された課題や受けたテストに対する評価で、これが卒業要件になる。もう 1 つは専門分野の評価で、これが進学希望大学の入学要件に直結する。この評価が入学要件に足りていない場合は、いくら卒業要件を満たしていても大学への入学は見送りとなる。そういう生徒は、大学進学は諦め、専門学校へ行くか就職をするかの判断が求められることになる。

◇ 大学入試を基礎から知る

第5回 <AO入試の仕組みは？>

“意欲や適性を評価するのがAO入試”

面接や論文審査などを繰り返し行い、大学が求める人物像と合っているか、じっくりと時間をかけて受験生の目標意識や適性を評価する、長期間型の入試である。そのため、大半の大学は、「アドミッション・ポリシー」という形でどんな人物を求めているかを示している。「その大学で学びたい」という意欲を強くアピールすることが合格のカギとなる。

“学力を合否基準に含める動きが定着”

もともと、AO入試は学力評価に偏らない人物評価入試として導入された。しかし、入学者の基礎学力への懸念から、近年、学力試験やセンター試験を課す、資格・検定試験の成績を利用する、評定平均の基準を設定するといった形で学力を把握する傾向が強まっている。

“国公立大学のAO入試”

出願9～10月、合格発表11～12月上旬が標準的な入試日程である。選考方法は1次が書類審査、2次が面接・小論文といった方式が一般的である。その他、セミナーやスクーリングなどに出席してレポートを提出させるといったものもある。また、基礎学力を把握するために、センター試験を課す大学も増えており、その場合は合格発表が2月半ばとなる。

“私立大学のAO入試”

私立大学のAO入試は、一般的には9月以降に本格化し、推薦入学の始まる11月初旬までに結果が判明するという日程になっている。選抜方法はバラエティーに富んでいて、大学によりかなり違いがある。多くの大学で行われているのが「対話重視型」のAO入試である。エントリー後、事前面談、予備面談など複数回の面談を重ね、合格内定を得ることができる。学力よりも、大学・学部への適性や学ぶ意欲がより重視される選考である。一方、難関大学では、国公立大学と同様、1次が調査書・志望理由書などの書類審査、2次が小論文・面接というパターンが一般的で、加えてセミナーやスクーリングの実施、プレゼンテーション、グループディスカッションなどを組み合わせ、時間をかけた選抜方法を採用している。

● AO入試出願から合格までの流れ ●

